

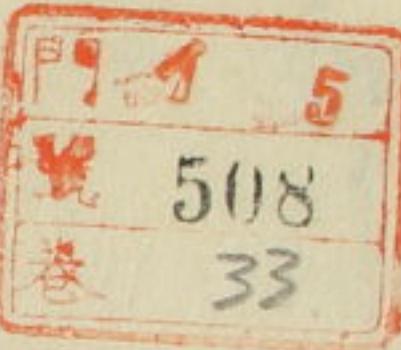
鹽虎三篇

1曾5  
308  
33



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

卷之三



明人陳元賢筆せし聖号と穂積氏は藏本也  
彷彿先師孔子神位と有穂積氏云陳氏塔聖号等  
や一時側に印石祠（シモツニシマツ）後此寺ノ御と施  
しゆじゆ不陳氏云凡聖賢比肩と書焉  
ハ更不御手と施止と。惟廟宇可奉御官章と  
書也。而御手と告られ。中御殿御と傳是文  
呂有之ありると一文。

或問二所大神宮あら海の先と移せば久の御前を  
曰穂积氏傳有天疾者ハ不入宇宗廟ヒシモト  
庚喜曆運國（カニシキヨウルンク）亦名（ナガムニ）御記（ヨウキ）以神武元年為周僖王三年革西  
按僖王三年壬寅也書（シテ）以傳疑耳

。二十八代の天師張廣徵符と瓦に朱書して他に  
吉慶丸蛙の声と止ま輶軒錄（シモトニシマツルク）御道  
士符章と事ニ一玉印と以て鬼神と福祥を  
足のト部家神（ヒモトニシマツルク）正車と以て驅と云ふ私言と  
口一毛ウと道家如意にて中面淳層ひそみ  
なづひて佛法とセリ。密家比秘書に道家此年  
多きとある。且シ古來稀用古くとからるとト氏  
ひと小ちいしる御道秘行（ヒモトニシマツルク）と云ふ事と思  
は。人の惑。神の心と賣て歎に秘とぞいひむ  
也。一也。

。我主每歲十二月十日家禁塵塵と掃（シモトニシマツルク）。

日よりて細例と以聞書所謂臘月ニ冒每家掃  
塵者亦抄出方に似たり頃袁中郎集と云ふ其  
歲時紀異引王志云十二月二十七日掃塵日除殘  
火云

○東科說我列風土記北土といひ又苦吉不滿公の  
尾列記としよ書わるくノ一釈行譽抄に足らず今  
ノ名をとく小字トモ又風土記ハ光明天皇時之に始  
一年續日本記に其趣毛とぞす朝野君載醍醐  
院天皇時代法事ノ風土記と皆追也キトツビ  
是延長六年奏貢ヤ一木ノア凡土記の殊尚  
ニテナリハ延長凡土記ナリ

○或向倭俗りと色ぬシヒ細工雁乃府志に臘も  
ソムシテトビ書小出シテウロ曰定てヒ素方ト  
リテノ兄弟を仰モ繫耕録古四に元創尤範金  
搏操リテ佛像を仰、搏操ヒ帛ヒ土偶室に置  
テ鬱林ミシマトシ諸其土偶ヒ脱毛ヒ鬱林帛儀然  
ヒ古像ナリヒと搏毛モ又脱毛ヒヒセ方セ  
リ是我國モトタスナリ

○今巫祝祈禱と申シタミ矣密室の行法考今  
事ナリ又と渺々と渺々と渺々と渺々と渺々と渺々  
人と多集め圓音ハ中臣宿の狂歌と唱ニ慶  
トナリナリト名也一千度萬の後ナヒ

久の事又千萬序教授ハ太陽瀧陽師事に祐家是  
勤め修業教養と中臣福と度て愚鈴は氣度全體  
延佳後式に及テイ人材あれ福僧れテ郊万松徑  
を讀誦シテ松林翠谷中清音也

。出雲可可浦ちかの松見るやうて今より東瀛了  
細川連舟あり行

。江道すりまされどじやまのよかめらと清流  
むしぬとかとくもせあうにゆく

。わね定は銀山の磯原中修村篠井の内家幸  
某能丸さかはすせや那脇の清月一小石を拾  
ひ帰るセ一ヶ月とつておのづかう行

。廿二年事母石川接ひまうにむり形老姫れか」と  
て暖石とくと暖石とく四石を金あら二千余年に  
わすかとぬとくとくを仰石次仰在強石とく強石とく  
不ふかう少石皆無其能にかう是と紫を今  
然即とくとく面かうれ半とくとくとく

。招牌市店の看板ぢり  
。そーへ飯匙と俗に干と云フドハ茶匙今蓋透  
一 飯匙と俗に干と云フドハ茶匙今蓋透

。盤ハ圓墨の称今俗ハ方盤と云ふ也  
。内極代ハ持れ曲めり  
。方盤等のあれとまとの叶梓などと作ふと被ふ

御書院

新舊和諧集八日曉旅

信はうもあらうとどもくと  
いふ不うう写風の浦〔ゆべりうきそよはせん〕  
山河うりとれ黒にうつ毛をもれ  
喜也留蠻語〔りうかんご〕朝鮮所謂烟筒也又真竹と  
羅宇〔らう〕と四羅宇八蠻國の名其地黑班竹と產是  
と取納省に化承左小名と也

山向うより生のれ里へゆきの事もあらそ  
ひのとちよのものひのとよのとくのとくのと  
喜せ留蠻語有朝鮮所謂烟筒有其竹と  
羅宇と羅宇、蠻國の名其地黒班竹と  
と取綱管に化る在小名ヒセキセキ  
清人其他外王比人ひと骨ま全麻比  
大比大比領に

「嘗て物の仕事うらやむ足  
ふとつゝもの生れ等には古稼の内たゞ  
まよひの駕也のわたりもえりをもる年都  
濃列かあね上河村道ゆきとすなむり  
塚川一豆野地を因ふ雍凡り了音王也  
翁尊まほうりて森牧而年す所のちうけんち  
て其首のみ人そやけの弗能津んせめりえまく  
壇上としよみわ、草肩よろとねりと青碧  
叶うううせひみてかく人し  
うを内にとては傳がつておるとおにひ

己未秋九月旦長官練丸事通長公記  
寔見弘元年五月絲服著矣而之北系之於  
之有事也於家作矣於有事也於家

大納言經信

わが身にあはれの如きを御下さる事うけ  
お即ち先帝平定三軍の功を以て近  
臣もつゞくやもとから申すに甲大納言卿  
肾病卒世不仕ありげらむ下総國へ下られ  
ゆふるもあらわ

眞心ひきあひに小豆之一物。次  
千葉はいわば南朝の謡を物語文實  
公と云ひ

。工藤新蔵入道の内相様子といふ、言動を  
一也との事もち年も下りぬるに年月を  
多く経てちぢくてもまし ゆまとやめてさすらひ多  
きうりん渡念るゝかし者ぞ」不意を  
せむやうに事わざとおもひてうそをわざく  
す

内閣文庫蔵  
明治三十一年正月  
大日本圖書出版社

。吾邦ニ儒士多刹婆ニシテ経網ヲ収ムル凡  
事も有國運盛アリ叶帝都ナリ諸列國皆  
學校ナリテ学と勸業と從う接觸出焉て重威  
に壯政年ト急生也世甚へ皇化弛て學校廢  
朝臣流放モ偶傳官代帝門下在考政事に  
上から下詔書宣命令草山ノ先刹婆等  
カリ下下は此モも書セリニモハ儒舞と考る事  
俗僧也即ハ異邦に使一且書詩窮器也皆僧  
家の歟トサム而小世人也トテ学文も修業も素未  
一ト吾人の業也非もト行ふを控シシム也  
サニ近世蘇程富貴稀也トテ儒士と其女也

ノテ漸次同ノ自ふニキアリシトシ也但程富  
利勢比於ト改めモ故に其門下皆是小倅て因循す  
丈儒士比僧網ト叙ナリ中ノ本體者矣少ヒキ勒ム  
古也也爾ト亦利勢比者即後也其家術裏也  
其人がノ僧家醫書ト讀ト刀圭を施す者有所  
謂洛城比九佛乃ノ等皓等比私是ノ光明帝九  
時九佛比淨土佛釋名ト能一取聖詔を賜ひ上池院  
僧網ニ叙ナリト林道春將軍家家小伎兩部人  
法印ニ御王蓋士佛三品章に依リト近事教令

○儒士東外影として儒官に任一奉勅の如く

る

○日蓮宗追却

花園院延慶三十一年三月以院宣追却事に  
是よりサリ伊豆院正永丸中數禁止事より

後柳家院太水四年七月山門許承家破却從候

今及此後承良慶五年五月三十日重申付徒

以日蓮黨宗外

正親町院文正三月宗論門口正親町院  
十日朝宜為宗外

江別洋巖院法論日蓮黨門口一流他宗ニ對し法華スヘカラスノ懺融ス

同年七月甲戌大恩院宗論徒從門口後陽城院度長八年十月

東本宗壽修從門口刑宗

之僧獻折言狀

不受布施僧配

寶貞文六年  
悲日流停止元源七年九月  
記原其寺大名寺トス

○續日本紀文武天王二年十一月甲辰立天自三幸參

河圓云土月丙子行至尾治連石山麻呂年麻呂

賜船宿於岡年從五位下守治比真人水宇封千戸

本主ハ持統帝御孫尾張王に御幸有り奉正更に是て空林ノ事  
不外レシ後もさうレヒヤ幸北ナミテテモシテウツル時也

○葺不合尊ヒタヤレのそとヤサカハ略称トテ和可小

又トヒリ續後撰神祇元慶二年日本記章宣亮波瀬

武藏鷦鷯草木合尊ヒタヤレ兵部卿本康親王

ワハ内陸ヲヒタヤレテアシハセレタケビヒシ義代

ヒタヤレテアシハセレタケビヒシ義代

又ハ音便轉語にて一名あれトヨ異ナク名不外の一件

○全唐万葉にウニシモシテウニ先已印の毛と令麿霧

始水逝ヒト云ヘ

○俗俗物の自由ゆく限リハトヨトモんきをもと

リムルとすと抑テ陳元贊云惟急と書く明

人の俗語かうとゆせり

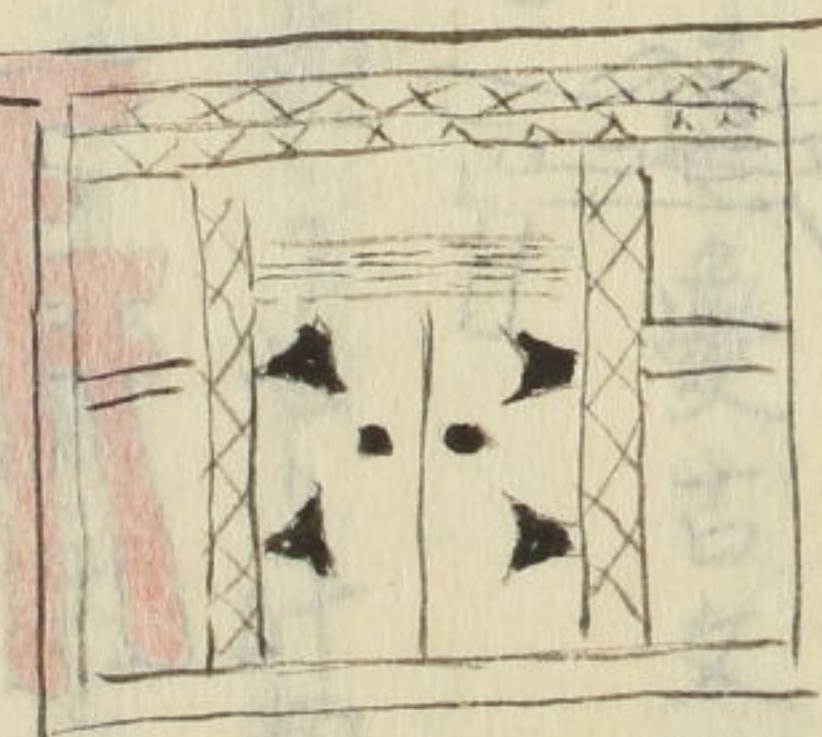
。寛永通寶裏に文字あり。津制衣も妙文字。辯春  
達筆かう

。寛永十幕下諸家代系譜を採り。又採道春  
等儒士及び五山の僧侶に由りて修撰。かうに  
儒士の如く僧徒とて次第不確列也。生原僧等が  
うして年論に及ぶるかとせり。年老の者是を  
和えて左右對座して可し」とちつとも。」と  
かん或僧富士比善門寺にあひて此年と證道  
春遅慢にして沙門とある。室久」とや」とうり  
に龍溪丈曰道春。年壯とひき。又曰。沙門也。

名の沙門とども朝廷官家の下に居るなり  
。とあり。道春は關東比僧官にり。また。佛事  
に列して何の種。アリ。と。おひら。と。おひらとい  
アリ。佛事。アリ。と。おひら。と。おひら。と。おひら。  
ノ官人。信あと。ナリ。と。擇。ナリ。ナリ。と。おひら  
佛事。ナリ。ナリ。と。おひら。と。おひら。と。おひら。

衡門遇

伊勢神宮の神つ右衛と名  
もエ亘ラミトニ枝のち此  
林モ法社の主不和異有  
今時村方の門を以て  
考め是に右衛の貿易事と  
アラモト今子の門をねと



詔せむをすむとて御はりものと工西  
竹本とよとて様らしめのちゆうと  
龜夏指すとあたのねと而  
あとひしひとととととととととととと  
多とおよびととととととととととととと

开

空あひの上枝月と仰りととと  
總今多すと云近に

日吉のせぬ此習合ノ制

制

。蜂箋古文注萬五邁及按當作丑幽閨古久注  
閒竹貝反按當作苦真及遼曼古文注林正及  
按當作体正反

古文と謹むる者看過アセリ叶類を多

。松永久季多聞城を築きて始て殿主と仰り人長屋  
と仰りて士卒と括一む後也城と築き住多聞  
城を横して呼んで多聞と云ひと不始より

。古川文山詩と陳文質に贈ア其猪尾朱印と施  
元貞カ曰凡文字を深一印と押す人を其參  
和ト之或ハ壁上に掲け又ハ後人に傳くと云  
今工山比文字を我玩ぬにせしむと

今時詩を以て印を施せんかと本り

。甲申正月十二日代夜遠近同僕、射場御寺、おほむらの  
事、おほむらにて墮落す。身死あり。死後是日全色の如く  
始終全路じゆと俗役五ヶ日よりハ石に墮りしと  
す。小納戸佛名は生。春秋傳云青墮石於  
宋さうとしる。教り。星落て石とちる。章文家  
說星宿ハ落り車か。中天ちゆうてんを行ひ流す墮て  
縫ぬい。右うより光也の爲て呼と史し。天鼓てんぐと  
いづ

。或向神社むかわ名神めいじんと大名神だいめいじんと  
元大社もとだいしゃ八位やうい之名神  
一位いちいある。云文德實錄ぶんとくじつれき仁惠じんえい二年六月以尾張國多希

預よ於名神。同七月加尾張國多天神從五位上ごいじょう而祀まつ。小  
社こしや也。又名神みわ小社こしや也。社多たう一。名神めいじん參さん或もしく之也。  
多たう天神てんじん一一作一於お保ほ。临时或とき作な多たう神じん社しゃ。神名じんめい萬邦  
崇まつ。衣ぬ神じん社しゃ。錄れき次じ大だい神じん。神社じんしゃ為志ためし神大是也。慶會けい會あ譽よ  
曰い大だい神じん。神字衍文えん有うと。今中治丹羽庄たん於お保ほ  
天皇てんのうの社しゃ也。久く貞治じんじ二年。本國帳ほん帳あ從つ一位於お保ほ名神  
云い云い今荒廢あらびして小祠こしやとと。

。我知多郡野間庄柿並村大御堂寺おほみやどうじハ贈肉まつ查源  
義朝香火こうの寺てに。今長野萬德寺支院東鑑  
四日故老丸曲まるく廐墳墓めい在尾張國野間庄無人奉詣  
只荆棘きよ之所掩也。而康賴住中赴其國時寄附畠壽

達少令三六口ノ僧俗不斷人也。云々曰十文治六年十月者  
以尾張國御家人僧細治部太丈為墓主案内者到當  
國鄉間庄并故典ハ既廟堂此墳墓被掩荆棘不掃  
為薦文由日來訪閑東途今遣懷幼佛閣排席甚嚴  
度眼僧衆坐轉經之聲滿耳二品性之被尋靈筩  
曰前延尉康賴入道守圓え日寄水田牛町以降建伽  
俗大坊と云いテ阿麻尼安阿休ウ不休等平藍ニ高云  
札丸死と仰うて立一カタマリトモ布衣アシカシモヨシモヨシ  
九代とれらきトカタマリモ布衣アシカシモヨシモヨシモヨシ  
くぢり等立一カタマリモ布衣アシカシモヨシモヨシモヨシ  
トシムサ全の竹子もじりくめを

イツハリ五破ナリ 金ワシム<sup>士トナリ</sup> 傳

か馬車と車い都一偽幟の傍とも山崎敬義翁  
あひと石川三毛ひ改元考アフタ  
紅塵我に身すりそく一カタマリモ布衣アシカシモヨシモヨシ  
往小姓て文貞とをせ一カタマリモ羅山集書籠空房  
台廟の御時少や浮舟影とよは老商船に寄て  
往玉酒一カタマリモ布衣アシカシモヨシモヨシモヨシ  
と争ひ我商人と尽く乞捕投一カタマリモ財物と掠奪才教子  
捕らひて官長のあふ門の官我商人と互に逐に差を  
紛セシ封ニ強男の者即ちハ船を上り時一小刀と懷  
にひせりひにひりて進みて走るまゝと見に

を序すと利刀と胸ふわろ唐人等恐懼して船を劫  
ク云日本人と悉解て積歟と少くたすけんと云唐あ  
リと我商と云う 貨を取る事で船を白船を脅度  
ゆきよーと箇と捕刀とりてかくに海に船を走  
船入りく敗と數三船して急小船と勘  
と何げ夷人いんと見るもあくはれぬてあら我  
を歸る旨聽ふ達一船と賣一箇と轡を走  
便ら夷等追來て大きにあたとねとも大樹  
百貫め貨大老一千貫め毎年貢之と云奉  
て初年布て貨にかゝて年貢と称せり  
朝とさうは箇を殺すと夷等詰て帰る次

年納れと貢がヤハミ船をうりて臺灣船と  
賜ひて官と立つて命と自年貢を留め夷  
と罪とは是の每年未だ鍋を土窯にやく貢去  
年未だ夷にゆく故に一箇小室をあくとあら強  
姫後四年八月敵の功に多細川家に仕へ外強  
暴不道の者ありしハ浪人へて後山崎伊太  
助と其政とア不とまわすも

俗已、惡石ね底地ねと云ひと云式人辛きが云  
略りと云ひてにまほりし老の云々と蝦夷  
夫にうち蟲物を、蝦夷と聞へて嘆へ、名を云  
多ヒ魚をとれ二種類コモロにむしに云々の

賣りあらくの事と曰ふ矣にゆゑと射て斂る  
ちりとも方よりて公屋をミシスルトヨリ  
トクアリ

。寺社は什物ハ何の用トナリと考え寛とひが  
多々とハ行を度す者少らず五色の拂毛我店  
田の神庫小真柄ハ太刀の鞘也。其他寺社が私多  
一初神庫室物多キ中下白菊比翼琶長明  
三車玉等也。とぞれに申すと考へても  
水上宿主神社ハ第田主の別官也。尾張代也  
神宣職也。あ某件て祝詞と申ひ通じ矣。其  
家故より號の居すあり。甲申水上北祠官多木氏

詔て日当社を幣帛の申縁にしぬ年多氏也。祐  
に供毛御りにと年大正司社と以て號の祝詞は  
ノノ神事と云ひ一も古例也。とぞき  
此取と云ひ一例て有司尾張也。詰同モ墨吉  
謹文と題して曰水上の神宣職ハ神家多木氏  
爲中尾張守仲奉謹狀の事

讓与諸卿

一祝師藏當屋敷等

一社底給多義領其外惠

一水上亦宜耳外諸藏等

角野川方頃御本

右代々有重書等相別々に承て元範和圓所譲定  
實正也但庶子配分之事ハ為成敗少有枝節  
定主上ハ親類非坊者也仍為後日諭之狀如件

明應六年五月廿一日

權官司祝師尾張守仲春

わぐのとくわく久年我ニ通じとも知れに已入して  
社事とはまことに欲一あくまどと仰斯詔

けりゆゑ

○唐經翁籍毛參等邑人主掌論語二卷云云

極よりて金匱案本聖經とあると後世傳て  
經と名を以すと云

○蜜家護麻キの附土天をより小方室に留めと  
足十二串とさへ土室に併わと留め居間とす  
る事ヨリ其事ハ曰白角角持て改済師附  
至後にナニ事卒事と一般あり即ち不可内  
外ノ御一仕事ナリ侍う者ヨリは居無事モ  
れと云わむ是に似テナシナシト云う者モ御  
ツシヨクナリ

○尾伊門西の即幕及び白旗と代るものと云ふ者  
十九年十一月三日駿府ヲシ敬公に折十一年也  
○改済家波多利女と年後神忌記一金神と巨見  
充ノ一筆主ノ日本神道蜜記に在軍と云古

長姫の命と歎鳴呼あらん

○散位傳訓

刀作

。平家物語小松重盈金三千あれとやうてに於て  
沙汰とえども年も一千也ハす玉山の傳説ひり  
一而佛照移師傳光は所して帝すせう  
九五百四北田代とす玉山一守セラ年中其  
證印ありとし細川氏比家而小佛照も書と  
切さりて切りとを文字

王琰未頃要修行日用應須病苦傳會得下  
中端的意從教日午打三更

○佛照老僧

古

五花押

判印證狀ら一と文には何ぞうふつて宣旨與主令を  
もう一と年宋吏に乃へを但宋吏四石九拾百日本の深  
下乾道九年附明刑綱首以方物入貢云實に我  
主念院秉安三年にあり是童監施金の時すは  
。嵯峨帝弘仁六年四月近江國志和寺落成する  
。掌福寺永忠大僧都はすと宋と並び居し中更に  
足了す秋玉葉りとくノ一 楠尾明惠入宋歸却の  
茶の粒と持生て肥前小方振山に桂ノ岩ノ茶を  
修小梅尾に梅 又字源少卿と號じとて名め改  
作今大慈玉而瑞別今山寺の庵号一即ち其號也  
建寺事の件わと次も子萬丈空而歸る事多

湯とめりとからま義井義政の代よりて至式宗  
然所相承はこきと奉りて奉りて奉るも  
ハリハリ

○山王二十一社ハ字層の原にあり宇鎮經曰東方有七千  
太神其上首有三七鬼神正是也  
○胡の字胡圓の生のとそへとま時珍曰贊  
色者謂之胡云あくと胡蝶胡蝶也云アヘ  
○韓退之晚年声妓も金石の薬と聲也う事  
詩乃ハ張籍う退之ともうも詩にアヘテ弘農之  
詮花退之嘗テ譏人ノ不解之字一欽而省數於  
女伎及作李情士之墓誌或人敗人金石薬爾  
支那書水訓精要疏と云々

支那書水訓精要疏

呼退之の賢とくとくを嘗て譏たひよし後世人  
道口のよきもくもよきもとくもよきもとくわ  
バノヒトヨリ宣ひ

○四月八日勢力の社灌佛今とちくとくと神を  
ある所の俗四月八日はノテノシ精勤と云はきて  
往々て力病せどし家へにまつたの儀はる  
ばくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
堪か化けしりりのあくとくとくとくとくとく

○禮書水訓精要疏と云々

文集抄

祐和すいゆすいのわせにつけられたりたハ前半に  
年す

○咄 説文咄相謂也以口出戶云是小  
ねうとうもろと云ふ事訓もろ是も

○おの唐塞と云ふ者と曰ひてより南都唐の義  
を極神事と云ふも不まうらと終いの近づくるや  
にノ次の日今春其の精氣ゆめりとて其事云ど  
つてより詫へたる事と云はばと云はばと云はば  
云よりこそや

○開東少六ハ本伊達氏某、僕東都は在て瀛俠於曠  
當時呼て伊達少六と称して今治客游浹者と名  
キハ彼ヲ凡少似つせり

○せむか強謹あり者と母被勧申と云是則のを  
知那日主比城守織田信守、角力者即ち申と云

性陰躁驕易怒て情薄極て往來多路勤先  
念恐と爲一辯はと多く材武と強智と長足と  
くちに刑ちて後人陰險利とぬと云はざると  
云ふ

○墨濃國廣見素足寺に于代北丘尼の像か尼全  
越後守頭時のみにて足利讚岐守源貞代後妻  
絶城後出家して無著尼と云如天禪師と号せ  
始松見寺に名と爲て後七八月十日後洞に  
あと汲時桶脱落して水隨て走ぬ急給未満も  
欲と餘毛わづらひて桶のをぬけてゐる  
うむと日を度す

塔婆全に仰是佛是阿師に謁一京師入て聖一  
國師小參寺といひてあるもくかへハ堂氏繼母  
在り

○司馬子長、方下の山大川てありの事  
トノの紀行書一もあそて御圓貫之空居  
日記と併西り法師をかま候ふよそえり所  
思あわぬわざもと宿泊あれ。又觀音の比龜窓  
師うちこのつと土佛作縛年修也。アリとも  
シテ寺の通化と長ねるからうつゆき奈  
江へ遷れつ院布京ち重くかずアキ作紀行の事  
あつこは里れりもあらじも以モ身アツ

○新田義重建仁二年正月十四日卒

東照宮御在世時奏向仰従三位鎮守府將軍と  
絶り

○太中院忠吉御附室寛永四年九月二十六日卒

号清泉院尼空慈榮正大師

○前吉田へ東遠別見附めゆすとし宵宮御大  
祭、御供奉仰せり。猪牛並行。御多天<sup>天金其</sup>  
先四月七日より試小立し。猪牛並行。御多天<sup>貴御多天</sup>  
河原へおもと年一折の内々年半<sup>年</sup>とて御者<sup>御者</sup>  
一猪牛並行。猪牛並行。猪牛並行。馬頭  
とて。春年物と化すに。化すに。化すと。是猪牛並行

走馬に起りてあらわせ佛國の事す  
れぢよれとくわみのうの幸運は嘗て有  
ゆるやうにきづこしをのぞく

。異邪北御食夜日中の膳前に月見祭

祐果  
非  
等  
子  
の  
山  
の  
寫  
り

桃子 桃龍眼  
等の山の寫り

米食妙采根の

水里 宜山村八年母粟  
萬慈姑の  
臘味 腊鴨風而  
易 酒肉也易

許  
四

講義集卷之二

食魚至是日始  
食鹽

熟菜 鹿筋魚肚肺 ハラ  
櫛金 ハラハシ

右限木十般うる奈ハラミハ次ノモノ也

ウカタニ  
少い足  
等切  
但八月  
あまもれ  
めびすの

、究極の造化の巧をうなづかせるにあらず

土を壌と打かセ土手を引て積セ  
露青正月節薰火年二月龍鬚年三月  
四月

○ 摂別大坂二月十五日六日より九日北上氣満凡れども

獨得見寄。時乞度以高君

と寺僧兄弟と仰せられり。津守は情めぬかく  
御とちくやうに翻して仕出しがれと仰せられり。狀

一月三十日聖誕會舞樂の時  
北洋の獨特の風氣をうながす

日度富の手物田神官幸の阿伽井七波(作)小

サトハ水と汲つて一升と湯 小仮佛やうごりと  
土中より鳥のあきこりて是を鳥ねたゞまわし  
室ホトトアリルあるくあらむ作り仕事の人にかま  
りと寄りのすぢより御子は醫王庵北院と有  
寂やうしおちるやう仕事

○角黍 端午時食 やうす 粿年々みにひく 洗  
て丸せりとやに漏らきければスヌヌ草にく  
い胡桃と入て火とゆうべ 煙々く者或は震の身  
主に包れとおと縁にしやく食をすまひあ  
○天正二十年四月モクモのは破却 丹波の強卒  
長年の役 丹波古三番とあと礼放を被ふまゆ  
一に

ともやもあふ去り 田舎に在て肩背を被ふ  
手控えとてとせりとてひよふせば而御事と  
云ひのりそくく縁はゆくの身に付て日本  
津原守主を経て え源土年代を主事に定め  
て仕しは先もとく今朝の付を主事に定め

○ち家系道はと彦弓城と呼て和琴の名と號すれ  
緒やく持すに油(蘆荀)に兼往來事仕間執柄  
少佐仕合侍と云ふ御事とて中世公卿はよかと見置  
ありとて是も同明ハラ義清が軍の付をの爲  
て左近ノキ大歎の吉宗に白壁と之ヤニモ

。股部半藏ハ行堅先方武功の勢しニ別に軍を從  
一五首儀の偉と云々後一万五千石徳政有るも  
源人ね平越中守定綱の脅かり久之彼が如也  
食や一ち候の所あらず一うち死難御じゆせ  
まくもととおれりしもわてなまく  
ヤアあくろみ除き去れ仕下股部主を正義に謀害す病死す  
足利二年八月相敵死すレシテ  
是夜二年八月正義死す他家臣  
は子石多寺正和久・他家臣

。連う比佐連日本御尊河比磨利萬承波の御ゆ  
ノ事御ゆと稱されハ万承波集

佐保川のあせり入て持田と

うきわあぢ

ゆくも川ひ見ゆうら

と外のきりとまくすの根源とすれ是の是

まくじらぬへぐ

。布とか

徒然草と清風人古事記と云ふ事ある

材上院御記曰天應八年正月廿日母右山明雷曾今朝

櫛尋常ノ御笠扇ヨ攻テ懸芦笠扇以鈍色織端

帽額云西文記亦因一色通典に古之帽而

額ヒテ故帽額ハ頭の脇をうすらハ非ケ

も甲ハ左の脇下も上の方の脇と幅の内たゞどヨリは  
けと一と云ふと云ふのむりから殿上首ハ翠  
笠と重き其上に帽額と仰せられにさうのル張立  
しかときあやのうとねんてやとあや今傳て云

ハシテ不謂額か。帽額の名ハナヒ百勝也。ト  
サキトアリて上石川。リカトモカトミ之扁擔。ト  
額。トアリ。ツヒに掛ケ。リアリ。テ宇祐也。トホ  
帽額ハ侍サムの目也。トアリ。ツヒの。シテ生半経等の  
帽額。トアリ。多喜の端乃帽額。カ。脣紋。トモカ  
ソニ。筋カ脣。ク。紋。ト勤修。ト。ノ。門。作紫宸殿  
大祀。時。壁。ア。リ。上。挂。凡。リ。帽額。ハ。歎。聲。ト  
松。テ。ア。リ。今。リ。

○。為好法師。薦應。え。年。二。月。羅病。上。白。胡。ア。  
典。革。院。和。氣。清。え。ヒ。モ。往。賀。玉。に。赴。ア。ル。日。  
弟。穀。ニ。リ。石。ト。約。如。恭。作。カ。多。年。の。恩。使。紳。ト。三。月

奏曰。兼好法師。生死無常。の。急。ア。兼。門。喜。  
ニ。テ。ア。リ。頭。ト。瓶。詮。系。ト。ら。同。又。弟。穀。近。村。民。  
に。寢。仰。ヒ。云。ニ。禪。良。基。公。ハ。年。来。和。平。の。友。竹。レ  
久。病。ト。向。し。の。僧。ヒ。住。四。山。の。寺。由。井。庄。に。寂。ヤ。上。白。  
主。上。溫。勅。祐。云。同。下。五。日。弟。穀。辛。石。鳥。目。二。責。  
を。尚。ハ。由。井。庄。に。墓。ヒ。祭。テ。遍。照。寺。の。序。ハ  
金。シ。テ。付。加。エ。王。金。寺。そ。義。安。寺。セ。勒。ト。モ。口。モ。セ。リ  
贈。權。僧。都。由。因。太。曆。十。八。に。記。セ。リ

○。至。死。寺。代。く。堂。上。カ。ム。の。ミ。ト。ア。リ。首。孟。院。ヒ。入。利  
始。支。ト。

貞如 棲中納言兼仲

善 棲大納言俊光兼子

貞如子光玄其子兼俊比白俊光兼子

和也 本承寺の役に薄く

綽 棲大納言時光兼子

巧如 促佐資原兼子

仰木千達如ハ絶肉大食萬宣半子實知大臣

勝光兼子因如ハ棲中納言永絕半子也但因如  
公代に不立叶等傍の事と云ふと而や折貴介の  
子として家と高弟もあはれ共に佛者の如不  
可少般

。本承寺親鸞之子善鸞其子知信之孫存覺之子  
在大僧都絶巖号慈觀江別錦織寺の元祖即之

。毎官頭藤原叙用を称名と号す。其頭藤原  
為寛と工藤と早と皆官と氏と略て呼引  
あり。其子孫重に称号と仰加賀介藤原景道とす  
加藤と呼す。其子孫和琴と称す。

。在原實直尼馬危實遠美子と号す。其子と  
一子の孫和琴別當室。和琴の孫武志と申て  
左近とす。和琴の左近に上に生て祐也と

。若光寺の佛始庵張圓是因宿に付來と稱す。と  
あて立向土ノ子承と云ふ

。掲すに波源と仰す。すり草庵と仰り是す今

。是高比四忍今庄下に門て留居町若光寺すと云

勅撰等の書籍は即ち端に書かれてゐる筆記  
古文家の方には又佛心山門中寺八端には頭  
をもつて

。構列其庫平相國清賀の石塔也。塔銘曰弘安九年  
二月大政入道公養和元閏二月堯志沙塔之總金平貞  
時の建也所に之を重元寺の跡堯志不外乎也。

12

サテン  
サテン

ササ  
ササ  
ササ

ナシノ  
音聞

四

日、

七  
火

卷之三

八  
四  
卷

○天竚鬼八部 阿耨多羅三藐三菩提

是佛者妙寫此時心事與之同也妙寫者

○イロハタガのいハシ  
・ 梶也 宇

八

卷之三

萬葉等に於て

江ノ衣ぬすへ守也又佐名れうちにてよ、テ少ハ爾  
はハ明ホカ巴れ、然か、いふるもれ、化え見え

國朝書  
叶元修  
方正之

いふしむ  
傳説の有り得

萬葉集第十九 黒土の巻ノ神と傳ケ。祐智屋佐の  
事。而ハ御靈主也。不也。是

正定府下鎮守府移軍源縣支領凡屬也

俗四天王獨武者と云其姓名系高乃アシタカ少佐ササシロと云  
内ナカ舍人源綱ヨシツバサ御子年竹子タケコ子孫スル之無ムカシ之ノ  
勘解判官中ミ郎李武リムコ之ノ次官事シガシ事モノ

左衛門至橋貞光ハセガワサムヨウ左衛門スムヨウ

生年不詳

主馬丞公時マサヒロト西田ト移シタマツ

生年不詳

丹波守三藤原保昌 平井ヒライから角カツカと云左至多又シモタシ致忠シモタシ

ニシモト獨武者ソクブサ

。淨土宗僧禪衣ジントウジンエと背ハヂ毛モウ抑縫イフシと引ハサウハ夙連常  
祐年一介住僧本禪僧ヒンセン故衣ハタチと改ハシメ其徒皆繋  
き翁シキウ法子哲那環タケナヘンと隠ハシメ今不可是可繕ハシメ玉禪衣タケニエ  
李列

。文龜六年授屋形号於宗義盛 將軍義尹ヨシタケ令之  
中壢武將屋形号ヨウジヤウジ賜ハサウ士多シドウ

同十三年許朝倉孝景持白傘袋并數種鞍覆  
今諸太丈ハシモト人等官の社家ハシモト白傘袋ハシモト持也倍臣  
七毛纏ナナモハラの鞍覆ハシモトを委く

。天文四年朝倉孝景免ス塗裏ヨ將軍義晴ヨシヒロ之令之  
元祿三年長尾輝虎許綱代ヨウジ義輝之命ヨシヒロ

或曰我國ハシモト之士ヒト必朝ハシモトに參ハシモト之官宿ハシモトと呼ハシモト  
ラビ其始黨ハシモトれの賊子剣掠ハシモトと之大業ハシモトとあらわし  
今之交ハシモトの時ハシモト之小業ハシモトを紀ハシモトせよりゆハシモト不官宿ハシモト  
自進ハシモトに仰明ハシモトにえを感ハシモトと能ハシモトる故ハシモトハ廷宦ハシモト小鹿ハシモト

口宣ヒヤヒシ翁方に勧めて行其狀の要領をすうされ  
んるのとぞひり住居りて朝夕雖にれども官めりて  
城とわきひる所を燭え不避御のと典居秀  
吉神君ち夜にあ候の日自旅邸にありま  
憩ひもとゆハリ活と活安乞を示されハ即ちの  
文也に筆ハシ海小もり故有れと云ふも  
咸とせり門内庭階きよしに似たりハ正寝の内官  
と云ふ文也アラク又寝起る事無くモ一キ  
にわづもあ時御室官位と會へりと云ふ  
猪貞代甲申

十七日詠

○或曰表鍾ハ筆架也ト云

筆の本小竹也ト云

予曰潛確居類書八十九。文具筆架の條云。致虛閣雜俎  
義之有巧筆架名扈班獻之有班竹筆筒名表鍾  
也無其匹。ヒシテ筆架也。表鍾ハ筆筒の名ぢりて名に  
も次マ此れと筆架トセバ也。上にはおとがち有也  
。佛前此ニ有ハ海派碎に斗帳の字あり。小帳也  
形如覆斗ヒシテ斗帳と云へ

。別碧海弘平田庄上野城主上守右尉物部照氏ハ  
新田た兵備佐義無属ヒシテ戰功れ其畜弓箭  
をひそ御奉ヒシテ平岩主斗頭親吉等より祀  
。官位問答に昔ハ六位の考も姓少ければ給臣と申  
。後多ね院ヒシテ禁制御ヒシテ御内に御制

ちよきうちと云々今之往の者もまだ餘月古は  
とあるめ未免

もと云得せりとすれども連うりとす  
にあらわす一通書くは收うるや  
大きひとよのほへつとまくらるいに

慶長十二年十一月五日從徃行左近衛權中將  
兼薩摩守源忠吉歸薨号性高麗殿三高前觀音  
席將憲室玄白大居士  
同年四敬公に尾列の内と封カヒ後慶長十七年  
壬子五月濃別元和元年乙卯八月信別木曾夏  
ひ濃別川上等印附二万二十石余ト云元和五年己未二月  
台廟舍カヒ濃別カヒの比肩して塔追也古井作  
。吾五日京師加茂の鞍馬ハシマと號シテ之を名す

我聞田にて馬場渡アリて神樂御學の御輔門  
馬頭人速帶一搭馬は天孫皇門より當山  
御主事又入主<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>高麗<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>昔ハ競<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
ト<sup>ト</sup>シヤ錦輔西頭人ハ他馬頭人<sup>ト</sup>是加茂<sup>ト</sup>競馬慶<sup>ト</sup>  
東伯鉢サ無<sup>ト</sup>と講<sup>ト</sup>東帶一<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
人<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>設<sup>ト</sup>て自<sup>ト</sup>主<sup>ト</sup>我尊東征の<sup>ト</sup>行ひ<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>いも  
ナケラタニ

○宋儒人の影像と<sup>ト</sup>争<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>モ<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>送<sup>ト</sup>り當<sup>ト</sup>  
化の人<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>も韓照載と<sup>ト</sup>争<sup>ト</sup>と退<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>  
セ<sup>ト</sup>レ<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>行<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>程伊川<sup>ト</sup>佛<sup>ト</sup>影<sup>ト</sup>  
と<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>影堂<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>立<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
ト<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>圖像<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>争<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>接<sup>ト</sup>間<sup>ト</sup>雲<sup>ト</sup>室<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>勤<sup>ト</sup>め<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>

と画<sup>ト</sup>ナ<sup>ト</sup>も追感<sup>ト</sup>リ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>やせん東波<sup>ト</sup>孟浩然と  
うる情<sup>ト</sup>おゆハ<sup>ト</sup>方<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>きマ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>の終<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>  
自<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>注<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>云<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>場<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>對<sup>ト</sup>  
四<sup>ト</sup>岸<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>先<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>迷<sup>ト</sup>像<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>并<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>誰<sup>ト</sup>追<sup>ト</sup>  
れ<sup>ト</sup>心<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>下<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>廣<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>象<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>作<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>  
不<sup>ト</sup>可<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>物<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>以<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>妙<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>物<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>  
て<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>瑞<sup>ト</sup>造<sup>ト</sup>化<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>奇<sup>ト</sup>跡<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>靈<sup>ト</sup>氣<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
宋儒何<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>争<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
生<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>仰<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>首<sup>ト</sup>青<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>到<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>處<sup>ト</sup>紅<sup>ト</sup>樹<sup>ト</sup>  
自<sup>ト</sup>開<sup>ト</sup>花<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>鳴<sup>ト</sup>

○或向八情宮と源氏の氏神<sup>ト</sup>、<sup>ト</sup>上弓矢神<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>祭<sup>ト</sup>

法和帝代孫也。高祖の御男也。左武と幼名也。  
左ノ又ハら矢神也。とりて。神功皇后之舞也。  
タリにうて。シテ。ハ。後ち神也。と。御舞也。  
嵯峨帝代勅。アリ。モハ。臣義家男也。ヒテ。え渡し  
ハ。後左郎也。モ。一。是。ヒテ。ト。小男也。ト。ミ。宗モ  
義家也。あ。御舞也。と。深井是。ヒテ。貴人。ナ。故  
皆石清水。と。以。舟也。と。又。ハ。船。と。ラ。舞也。考  
幸詫宣集。ヒテ。ハ。后大善處現セ。十許老翁。白  
髪之射持。自木之弓。以。サ。膳。卷。之。矢。立。固。考。經  
是。將。つ。と。征。一。ウ。時。ア。ト。ロ。ア。是。等。と。以。弓  
矣。朴。ト。ノ。御形。と。似。也。あ。ふ。モ。舞。と。會。序

カ。ト。リ。今。ハ。利。カ。テ。母。の。シ。フ。及。ミ。神。人。と  
思。い。ぬ。又。神。也。神。也。取。も。と。り。ハ。酒。屠。我。妄。謬  
豈。信。シ。ク。小。豆。シ。や。ハ。准。宣。ハ。二。主。也。社。廟。寺。廢。荒  
ハ。祀。祀。也。神。也。少。れ。と。シ。ト。有。人。ハ。次。ニ。異。性。と  
ヤ。兼。平。に。將。門。輕。セ。一。叶。初。也。ト。モ。ア。ハ。八  
情。一。不。に。何。所。社。也。傳。化。不。わ。門。儒。也。近。某  
神。ハ。先。ト。不。知。其。御。神。奇。端。都。を。ヒ。ト。考。考  
幸。年。一。皆。正。史。載。也。不。に。知。以。吾。子。奏。是。佐  
鹿。と。赤。江。た。ク。ト。傳。訓。モ。今。俗。も。忘。た。ク。ト。讀  
リ。ほ。か。一。志。に。の。カ。セ。ア。ハ。御。音。に。讀。す。  
宝。に。ド。イ。テ。ア。レ。ス。唐。ト。ハ。セ。タ。ク。ト。モ。モ。モ。



○笙歌まにうゑと後アウケヒ云訛リテモ  
○式向豊前國高良山カウラハ字音御是ハ左タリ  
右ニ有モト序ハナカ曰先高音セタテ訓讀累本  
紀承和四年條に豊前國田河郡香春ニ社と云是シ  
○我主古ヘたモモヒシカシシ高音被ヤアナキニ中  
モサと著袴の時腰ヤーに一僅後拂モルキモ叶イ  
少袖と著シテモモト古記ニスケテ  
たすと練綾紋小袴ウラハ平絹ニ幅懸  
緒ヒロミ守治承三年東官ム徳御著袴也著  
拂のすねのくもにようてゆけりて可られ等と  
著拂ハナカシヒ云草本和言集 ひまし

に及ばず

婦人の首腰カツシマヨリと袴帶領巾ハ肩に  
ナシケーハシカ

○號安達柳原よりも多堂家の領下に是山宇  
岩山の上に之の不仲に不負竹石と壁モカモ  
シモラ種木にて螺のれ蛤のれり裏實一  
玉を發己の五式人丸牛アテ又モ多堂家  
○宇賀神三子頭ハ老人の形ヒシ蛇形鶴形蛙喜  
アシナリカタヒシ神社に毎年一祭行はセテ云と  
ト登沙盆と入るの直ハ名井の水をヒシテ水と謂  
テ之像を浴ヒ後又金銅燒物正殿背中冠堂度  
候也愈々享御所御の附加也ヒモハ脱御の事

巧ちりゆうりし極すに宇ナカヌ耶ハ梵語にして  
白蛇と譯キト密家姓氏流傳に叶ノ傳云是を  
所セヨトアモアリテシテシ源家主の御事ト不ハ今首  
蛇身の像ナハ侍御又儀の上位蛇と稱してテサミ神  
云山國論著  
云かれに付属け事ハ中世神主の祀也トアモ  
辨才天と辨財と半頭上に蟠蛇とひも寫真辨天  
セヒトソ家めが付ててまく行也傳比新  
像も丈と被ト作すやニ一二にあり

○因詣錄云余年小在江漢與君爭兒戲以鼙為  
銘鳥翎飾其上列袞紙為旌旗作戰鬪之像云  
荷鵠鷄牛小兒の戲我も又かくのトク倭漢地夷

ナシトシ人體のをあしめ是はてもと作

○また居也。やううの。ま作と。さもととの。びうゑ下。  
かくも。りとかー。六家集にけうの。ひうゑ下もる  
の。六家集にけうの。ひうゑ本宮也。もうちハ奇俗の事  
もうちハ路の。さもととは男の称。ひうゑもうち  
もうちハ路の。さもととは男の称。ひうゑもうち  
かくも。

○清波新志頃年西湖上好事者所置船舫隨大小皆立  
喜名<sup>ヨ</sup>如鳳星槎凌風舸云云

○府下聖德寺初在富竹里本殿詔鷲<sup>タカ</sup>所屬て七轉

故に七宝山と号す。其中柄丸の鉄ハ今古一  
極なり。伊勢豊後の神人より氏族凡の鉄と云ちたり。  
ちや者濃州久々利の二段忍ち節くた刀也。  
土俗之需を年々解にて手取るも皆カツハ高きと称云  
主て上格の骨のなれり。かくらへりササケ也。

三毛ノ代くはておゆ井家と次々利城も土岐  
三河守と東武を守セテ。うそもな刀ハ内玉金山  
にり。又、兼中將忠政、太神宮へ歛送され  
うそ代くおゆ井の名に因ミ。是モ往來寺務丸  
はく但同名の刀也。

・東武守長可ハ源氏義家の孫。冠若親陽。

お東可勝濃州可兒郡中井庄鳥峯城に従事ト  
代くあに居モ。今比美山と明管年中  
金山と改名。名ふよ高也。長可父ハ三宅門  
可成といふ。東山可源寺ハ香火の寺。元永え年九月  
十九日死モ。心月淨翁と云武藏守ハ天正十二年四月  
死モ。鍊圓秀公と号モ。其子右近衛中將兼美作  
守忠政ハ寛永十二年七月七日卒。本源院先翁宗  
進と号。もけ等れ位牌可源寺にあり。子平信長京  
師木能寺にて事ありし時日。死タ。崇光丸ハ瑞  
桂院鳳山知賈居士と号。坊丸と寛山清源丸と  
法雲宗心と号モ。

・萬山の土俗云。角山の城ハ天文中に。本左大翁て也。

第十九回  
大納言と久松の争い  
大納言の死と後事  
久松の死と後事

○  
唐宋玉寫真

源仲正

鳴りつゝもさうするにまづくじゆくはすらすれ  
三河王舉母の里

三何玉矣初里夫本  
為家

本一正也。又云、國の事は、相  
ノノ原主、赤坂、主

于首為尹

卷之三

是れを以てはまづかにすむらゆきにわざぢれも

秋風送爽天高雲淡  
北雁南歸  
萬物皆有歸宿  
唯人是例外

中華書局影印

老俊

とくに御心でしのびておゆふの事も  
先あめをとそひの人、往々のまねに入りしと見えり。あらす  
唐告旨。後は墨のえりと日本紀に出るる多度南の名いをと  
スル。よりわざの事の峰あらざりたり。此すより一考  
河内守紀是火鹿子と云ひてけあた石器もとて平日高  
マサヒトにとどきてとくとくとくとくとくとくとくとく  
あ下  
多岐のれ汀と見えはるが御門の室にはりゆゑど  
此ハ神主多耶佛川うりと云

後  
頌

けくとようゆをまのあはれあしからむとぞきゆせり  
けくはくもまかみとよとていづきゆそとくわくへ云流法  
凡土記に冬根山とシテ羽根山と云ふと又春り年歌を想  
うしゆくり根山の陵名とぬらう

坂川渡中之上絶  
ま木  
聲をうるさくせん  
ゆきこよひの  
ひふた

永乾門院御画

かのよにあはれはまきと夜よめの里にまつ柳  
か乾門院印一画

せたれに海せぬか浦うちあくまたとや神のまこと  
知事のふすらう

おおむき

おおむきの波あまうを左へてはる浦うち

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき浦

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ  
おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

雅經

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

おおむき

おおむき浦はねのとよたてはる浦うちの浦はれ

巖河上人

おおむき

岩

河

上

人

伊弉諾皇子

年負市御宇上姫よハ神ミノと奉うらんアガミの姫  
ヒミトハトメ水上御子の御社有官獻媛と名  
古事記傳

尾瀬と名シテテリトハ古歌はミモ鷦鷯記  
に傳承すれど少く不麻サヌキノ尾割と云ひてみたハ  
鳥乃大納言也廣ばれ矣

ちとマニ此の尾瀬の海にモ帆りん便せもかれぬ追風  
そ竹をゆれに舟セ尾もうめわくのうことやう

おゆとの歌ハナチヨリ記に記すと云ひてモ  
と云ひゆれ歌もあむにテ

○桂綾里 松姫島 菊田左緑記に記すと云ひてモ

